

地元北海道勢によるホットバトルは鎌田卓麻 BRZに軍配!

Dクラスは日本を代表するグラベルドライバーの一人、鎌田卓麻選手が総合トップのオーバーオールウィンを飾った。



2019年のJAFカップダートトライアルが10月26～27日の二日間、北海道のオートスポーツランドスナガワで開催された。

JAFカップは全日本選手権とJAF地方選手権の上位ランカーが一堂に会して覇を競い合う年イチのビッグイベント。毎年、各地区を代表するスピード競技コースで開催されるが、今回は初めて北海道地区での開催となり、全日本選手権が5月に開催されたオートスポーツランドスナガワがその舞台となった。

スナガワは石狩川の河川敷を利用して2段に分けて作られた広大なダートコースだ。全日本では、まずスタート後、上段の土手沿いにある4速まで入るストレートを踏み切った後にタイ

トな左コーナーに進入、そのまま下段のセクションに入り、いくつかのコーナーをクリアした後再び上段に戻ってゴールという設定が例年、用意される。

WRCラリージャパンでも使われたコースは全開率が高いため、今回もゴールタイムは1分30秒前後と平均的なものだったが、距離が長い割にタイムはそれほど掛からない、つまりアベレージスピードの高さが、このコースの一番の特長だ。レースウィークは降雨がなかったものの、大会前に雨が降り続いたため、特に林間コースとなる下段セクションでは水たまりが残ったこともあり、事実上はウェットコンディションに近い中での一戦となった。

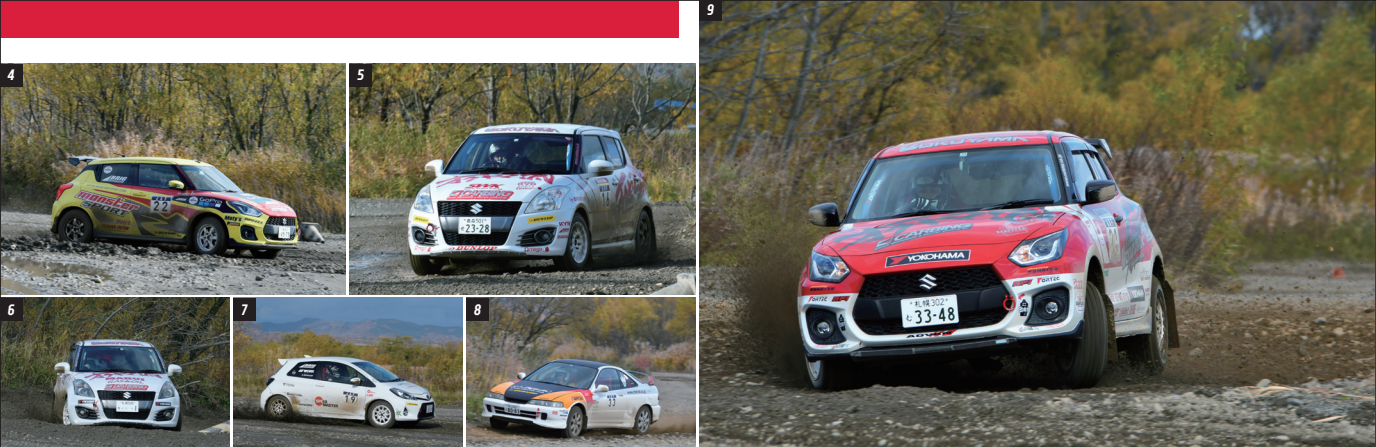
10台が参加したPN1クラスはZC32Sスイ

フトを駆る地元北海道の左近弘道選手がヒート1で唯一、1分40秒台にタイムを乗せてベストを奪い、GK5フィットの青森、工藤清美選手が1分41秒245で続いた。ヒート2でタイムアップを狙った左近選手だったが、40秒の壁は越えられず、逆に2018年の全日本スナガワを制した地元の井土拓巳選手が1分37秒台へとベストを大きく更新する。しかしそれを上回ったのが同じ北海道の、今季の全日本スナガワウィナーである内藤修一選手。37秒014までタイムを上げて、後続の工藤、佐藤卓也という青森勢の追撃を退けた。

「1本めは思ったより滑ったので全然、行けな

1. PN1では内藤修一選手が全日本に続いて北海道2連勝。
2. PN3は本命と目されながら全日本はスナガワで敗れた地元の和泉泰至選手がリベンジを達成。





4. PN2で2位入賞は全日本レギュラー河石潤選手。
 5. 僅差の2位に甘んじたPN1佐藤卓也選手。
 6. 井土拓巳選手はPN1で3位入賞。
 7. 九州から参戦の良本海選手はPN2で殊勲の3位。
 8. 中国チャンピオンの長谷川和也選手がN1で3位獲得。
 9. PN2は全日本チャンピオン奪回の宝田ケンシロー選手が賞状勝ち。
 10. 11. 北海道勢が1-2達成のN1は海野正樹選手が優勝をさらった。
 12. コンマ1秒差の接戦となったN2はチャンピオン北條倫史選手が賞状を見せた。
 13. N1で2位入賞の今田恭嗣選手。
 14. ヒート1はぶっちぎったN2岸山信之選手。逆転を許し、悔しい2位。
 15. 全日本九州ラウンドを制した河田富美男選手がPN3で2位獲得。

16. PN3の3位は地元の中光徳選手が獲得。
 17. N2で3位入賞は秋田の伊藤久選手。
 18. PN2クラス表彰の各選手。
 19. PN3表彰の各選手。
 20. N1表彰の各選手。
 21. PN1表彰の各選手。
 22. N2表彰の各選手。

くてダメでしたが、2本めは乾いてくれて、いつものスナガワに近い路面になってくれたので、もう失うものはない、くらいの気持ちで攻め切りました。セッティングも全日本の時とほぼ一緒です。今年も全日本の合間に、この地区戦にも出続けたことが、勝負勘をキープできたという意味で良かったと思います」と内藤選手。転勤で現在は最北端の稚内市在住だが、2020年も全日本を追いかけたいと、心強く語ってくれた。

N1クラスでは、北海道期待の24歳の学生ドライバー、海野正樹選手が2本とも圧倒的なベストタイムを叩き出して優勝した。5月の全日本ではN1クラスが不成立だったため、改定範

困の広いSA1クラスにエントリーしたが、ここでも3位入賞。今回は改めてそのスピードを全国にアピールした形だ。「地区戦は雨が続いてたんで、ようやく2本めで乾いた路面を走れて楽しかったです。雨はダメなんですよ(笑)。地区戦ではスタート後のストレートは使わないので高速の設定も全日本以来でしたけど、2本めの走りは、いまの自分の実力を出し切れたと思います。全日本の時の良かった感触を持ち越せたというか、思い出せたのも勝因になったと思うので、この勝ちをまた来年にも繋げたいですね」と語った海野選手は春からは社会人。来季は全日本を追う機会も増えそうな、若者の元気な走りに注目していきたい

ところだ。

参加7台がすべて北海道勢で占められたSA1クラスは、EK9シビックの山田将崇選手がこちらでも2ヒートともトップを奪って優勝をさらった。山田選手は、今季から本格的に全日本にシリーズ参戦した一人。しかしエンジンが不調で思うような成績が残せなかったため、今回はエンジンを載せ替えての出走だった。

「せっかく載せ替えたんだから、思い切って行こう、と走ったのが良かったのかもしれませんがね。2本めはゴール前でギヤが入らず、止まりかけたんですけど、それ以外はノーミスで走れました。この下段の柔らかい路面に合わせたセッティングもタイムに繋がったと思います」と快心のトライを振り返った。

今回の大会、このSA1クラスまでは、すべ



23. 東北地区戦を主戦場とする群馬の佐藤史彦選手がSC1で2位入賞。24. 永井秀和選手はSA1で2位入賞。25. 十勝在住の田辺剛選手はDクラスで金星まであと一步に迫る2位獲得。26. SA2鳥部亨選手は地元の一戦で2位入賞。27.28. SA2は5月の全日本も制した黒木陽介選手が快勝。29. 地元勢が表彰台独占のSA1は山田将崇選手が優勝。30. SC1は東北秋田のベテラン、竹村由彦選手がJAFカップ初制覇。27.28.31. 菊地真選手はSA1で3位入賞。32. Dで3位入賞は青森の須藤正人選手。33. SA2小林茂則選手も地元の一戦で3位入賞を果たした。34. SC1で3位入賞は青森の佐々木健一選手。35. 併催のFF2/4WD1クラスはかつて全日本のトップドライバーだった北海道のレジェンド、原安司選手が9年ぶり復活のシーズンに優勝で締め括った。36.39. JAFカップに併催されたRWDクラスは、RX-7vsビートの戦いとなったがFC3Sを駆った熊谷和幸選手が優勝。37. FF2/4WD1で2位の源健太選手。38. FF2/4WD1で3位は岡直貴選手。40. FF2/4WD1表彰の各選手。41. SA2表彰の各選手。42. SA1表彰の各選手。43. SC1表彰の各選手。44. Dクラス表彰の各選手。

て地元北海道勢が制する“ワンサイドゲーム”が続いたが、SA2クラスでは、全日本シリーズ3位、今季のスナガワラウンドも制している黒木陽介選手が貫禄を見せて優勝し、北海道勢の連勝を食い止めた。しかし、2位に鳥部亨、3位にも小林茂則の両選手が入り、参加18台と最大の激戦区となったこのクラスでも、地元勢が表彰台の脇を固める活躍を見せた。

続くSC1クラスではEG6シビックをドライブした東北のFFマイスター、竹村由彦選手がヒート1の4位からごぼう抜きで大逆転を果た

して、優勝した。竹村選手がドライブしたシビックは、数年前に全日本切谷内ラウンドを制したこともある東北地区を代表する改造車として知られる一台だが、竹村選手は、ここ数年、このシビックをレンタルして地区戦に参戦している。

「乗る度に仕様が違っているので(笑)、1本めはクルマを探りながら、スナガワも5年ぶりなので、コースも覚えながら、走りました。2本めは乾いてくれたんで、路面に合わせながら一生懸命、それなりに走れたとは思いますが。クルマは軽いし、トラクションもあって、ギア比も、どのギアでも前に進ませてくれるので、いいクルマなんです。オーナーに結果という形で恩返しできて良かったです」。ダートラ歴30年を超える大ベテランは、次は自分のクルマでまた勝



てればと、意欲を見せた。

大会のトリを務めたDクラスでは再び、北海道対決が勃発。今季、全日本でも優勝をさらった鎌田卓麻選手を0.45秒抑えて田辺剛選手がヒート1、トップに立つ番狂わせの展開となるが、「クルマが1年目ということでもまだウェットのセッティングが煮詰めきれてない所を突かれた。急速、何とかセッティングを変えて勝負してみた」という鎌田選手はヒート2で4.6秒のタイムアップ。対する田辺選手も激走を見せるが0.8秒、届かず。鎌田選手が貫禄を見せて激戦を決着させた。

